平成28年度 建設産業人材確保・育成推進協議会

作文コンクール

入賞作品集

建設業で働く方々の作品

“未来を創造する”建設業「私たちの主張」作文コンクール

工業高校生の方々の作品

高校生の作文コンクール

建設業しんこう KENSETSUGYOU SHINKOU 別冊

編集・発行 一般財団法人 建設業振興基金

平成28年度 建設産業人材確保・育成推進協議会
作文コンクール入賞作品集

選定結果

建設業で働く方々の作品（“未来を創造する”建設業「私たちの主張」作文コンクール） P3

国土交通大臣賞

吉成 健　佐藤工業㈱　福島県　27歳　「私にとっての「ヒーロー」」…… P4
寺田 智子　加賀建設㈱　石川県　23歳　「チームプレーの虜」…… P5

土地・建設産業局長賞

仲村 竜一　春山建設㈱　宮城県　41歳　「「笑顔」を創る」…… P6
中込 恭平　丹澤建設工業㈱　山梨県　21歳　「若者が語る建設業」…… P7
松本 史人　㈱河村産業所　愛知県　43歳　「苦労したからこそ」…… P8

工業高校生の方々の作品（高校生の作文コンクール）…… P9

国土交通大臣賞

齋藤 萌　福島県立喜多方桐桜高等学校　建設科３年　「技術者としての覚悟」…… P10
柴田 夏葵　富山県立高岡工芸高等学校　建築科３年　「空間を考えること」…… P11

土地・建設産業局長賞

佐野 郁馬　山梨県立甲府工業高等学校　建築科３年　「建築への想い」…… P12
岩丸 宗也　長崎県立鹿町工業高等学校　土木技術科３年　「支える力」…… P13
小山 美樹　熊本県立熊本工業高等学校　建築科２年　「私の憧れと夢」…… P14

受賞作品の講評

運営委員長　古阪秀三

「私たちの主張」は、建設業で働く方々から、将来、建設業で働こうとする若者へのメッセージ、また社会に向けた声であり、今年で9回目となります。今年は全国から452作品の応募がありました。最少年齢は18歳、最高年齢は69歳でした。今年から選挙権が18歳までに広がり、若者の主張が大いに期待されるところであり、記念すべき年であります。また、一方では、仕事の第一線を退かれる頃になる熟練の先輩の方々が若者に伝えておきたいという意欲を持って、「私たちの主張」をしてくださいました。応募して下さった452人の方々に心から敬意と謝意を表します。

国土交通大臣賞に輝いた吉成健さんは、『私にとっての「ヒーロー」』と題して、子供のころは叔父さんの仕事現場を見て育ち、大学生のころは東日本大震災とその復旧・復興に活躍する土木作業員や技術者に叔父さんの姿をかぶせ、人の役に立つ仕事、ひたむきにする仕事に生きがいを感じ、自らがその世界に飛び込んだことの心の様を丁寧に書いている。「まだ、駆け出しのヒーロー見習いだが、・・、本物のヒーローになれるように一生懸命生きていきたい」。

もう一人の大臣賞の寺田智子さんは、叔父さんが70歳近くになっても「少年のように目をキラキラさせて語る姿」をみて育ち、気が付けば土木の工業高等専門学校に学んでいたと振り返る。そして、「建設業の魅力は、各々の役割を担ったスタッフが協力して1つの構造物を造り上げることにある」と感じ、『チームプレーの虜』というタイトルの下に、その一コマ一コマを細かな描写を交えて書いている。それでも、身に付けるべきことが多く、くじけそうになることもあるが「私は負けない」と強い意思を示している。

土地・建設産業局長賞には次の3人が選ばれました。

仲村竜一さんは、『「笑顔」を創る』と題して、自分が新入社員として初めて経験した親水護岸工事の現場、そこに20年後、「パパー、早く歩いてよー。」と子供にせがまれ、自分の子供たちを連れて親水、川遊びをする姿を書いている。人が喜ぶのではなく、自らが住民として親しむ気持ちを素直に書き、「笑顔の絶えない未来を創っていきたい」と結んでいる。

中込恭平さんは、『若者が語る建設業』を「最低でも5年は怒られるぞ」と教えられてから2年半の現場経験を踏まえて素直に書いている。「怒られるのが今の仕事」、「職人さんに話しかける」、こんな毎日から「建設業最大の魅力に気づいた」。それは多くの人と出会えること。徐々に自信がつき、現場技術者として成長していく様子が目に浮かぶ。

松本史人さんは、『苦労したからこそ』と題して、「税金の無駄遣いだ」と騒がれた現場に赴任して以来、昼間は黙々と働き、夕方からは住民訪問を繰り返し、いかに計画を修正して住民の理解が得られるようになったかを淡々と書いている。その終盤に起った集中豪雨、その豪雨に手の施しようもない中、住民の「やれる限りはやったんだろう」のことばに救われた思いが刻まれている。

一方、「高校生の作文コンクール」は、工業高校で建築、土木の勉強をする若者が建設業に抱くイメージや夢を発表するもので、今年が4回目で、全国から1290作品の応募がありました。毎年1000人を超す応募があり、しかも意欲ある力作が多く、また、学校挙げて応募に取り組んでいただいたところもありました。応募してくださった1290人の若者の勇気をたたえ、また敬意と謝意を表します。

国土交通大臣賞に輝いた齋藤萌さんの作文は『技術者としての覚悟』。小学校4年生から8年間見続けてきた父親の毎日。「朝6時30分にタオル鉢巻姿で仕事場へ行き、・・8時になると職人さんと朝茶を飲み、・・、昼食は早めにとり、12時半には昼寝をする。・・・」これが父のルーティン、なぜ、この地味で小汚い姿や一連の行動をするのか。その行動が、意味が理解できたように感じさせる記述。一人前の技術者になるには、内容の濃いものを短時間で習得することも大事だが、単純で簡単なことを長く続けていくことがもっと大切、この覚悟をした。思わず応援してみたくなるような生きた文章になっている。

もう一人の大臣賞の柴田夏葵さんの作文は『空間を考えること』。中学生の頃に建築設計に興味を持ち、高校1年生で設計コンペに応募、2年生で高校生の部の優秀賞受賞。思わず作文よりも作品を見てみたいと思わせた。また、コンペを通して、「建築とは人と環境、人とモノ、人と人をつなぐ空間を提供するもの」との考えに至ったという経験。そのまま素直に育ってほしいという思いを強くした作文である。

土地・建設産業局長賞には次の3人が選ばれました。

佐野郁馬さんは、『建築への想い』と題して、建築を目指す若者の想い、戸惑いなどを率直に書いている。高校で建築学科に進学して、初めて自由設計の課題が与えられた時の期待感、意欲、そして戸惑い、無力感、建築を目指す若者が必ず経験すること、乗り越えてもらいたいことである。

岩丸宗也さんは『支える力』の大事さを高校の実習で感じ取ったという。建設工事は何をするにせよ、仲間と一緒でないと仕事にならないという「仲間の大切さ」。その仲間とは「コミュニケーションをよくすること」が必須。「私が仲間と支え合いながら造った物が他の人を支えている。いつか、そんな土木技術者になりたい。」心強い限りである。

小山美樹さんは、『私の憧れと夢』と題して、自分の家のそばに新築される祖父母の住宅の建設現場で働く女性の職人さんの生き生きとした仕事ぶり、その職人さんへのあこがれ、そして、思い切って声を掛けたことなど、自分の将来を考えるよいきっかけを克明につづっている。

「私たちの主張」と「高校生の作文コンクール」の応募作品を読みながら、いつも感じることですが、ご自身の経験談、親や叔父・叔母の背中を見て育った教訓、周囲の人達との雑談・相談など実態に基づく話・文章には迫力があり、また説得力があります。そして、それが契機となって建設業で働くことになったという事例が多いことにも納得です。

素直に自分が感じたこと・考えたことが書けること、悩ましいこと・問題だと思うことを文字で伝えられること、このことがいかに大切かを「私たちの主張」と「高校生の作文コンクール」を読みながら認識しました。これからも大いに文章を書きましょう。そして他者に伝えましょう。そして、それらが建設産業の改善、働きがいのある産業へとつながることを期待したいと思います。

写真撮影：衣笠名津美

建設産業人材確保・育成推進協議会

“未来を創造する”建設業
「私たちの主張」作文コンクール

趣旨

国土交通省と建設産業人材確保・育成推進協議会では、建設業を担う方々の意識高揚を図るとともに、広く国民の方々に建設産業の役割や重要性についての理解と関心を高めて頂くため、建設業に携わる方の「夢」や「憧れ」、これから就職しようとする若者へのメッセージを「私たちの主張～未来を創造する建設業」として募集し、優秀作品への表彰を行っています。この「私たちの主張」は平成20年度から実施し、今回で9回目の実施となりました。

募集概要

募集期間　平成28年5月16日(月)～7月15日(金)
応募資格　建設業の仕事に従事している方
題　　材　建設産業がもたらす「夢」や「憧れ」、建設業の仕事を選んだ動機、仕事のやりがいや自分の目標、これから就職しようとする若者や後輩へのアドバイス等、建設産業のイメージアップにつながるテーマ。
応募総数　452作品

表彰式

平成28年10月7日(金)に国土交通省にて表彰後、同日行われる「優秀施工者国土交通大臣顕彰式典」にて、受賞者の紹介及び大臣賞の朗読を行います。また、優秀作品は、(一財)建設業振興基金のホームページ上の「建設のしごと」等に掲載されます。

「建設のしごと」　http：//www.yoi-kensetsu.com/shigoto/index.html

選定委員

古阪 秀三　京都大学工学部工学研究科建築学専攻 教授
　　建設産業人材確保・育成推進協議会 運営委員会委員長
星 直幸　(一社)全国建設業協会 理事
池田 愼二　(公社)全国鉄筋工事業協会 理事
　　千葉県鉄筋業協同組合 理事長
　　(株)ダイニッセイ代表取締役
木村 実　国土交通省 土地・建設産業局 建設市場整備課長
矢吹 周平　国土交通省 土地・建設産業局 建設市場整備課 労働資材対策室長
宮嵜 徹　(一財) 建設業振興基金 経営基盤整備支援センター 副長
田尻 直人　(一財) 建設業振興基金 経営基盤整備支援センター 人材育成支援総括研究部長

国土交通大臣賞

私にとっての「ヒーロー」

吉成 健［佐藤工業㈱］

私が建設業に興味を持ったのは、建設業に携わっていた叔父の影響が非常に大きいと言えます。

幼い頃、私は叔父と様々な場所へ出かけました。その都度、自らが施工に関わった場所を誇らしげに紹介する叔父に、子供ながらに「こんなに大きい建物を作ったんだ。かっこいい。」と憧れを抱いたものです。そんな叔父は私の中で「ヒーロー」でした。そして、いつか自分も「人々が生活する上で欠かすことの出来ない道路や建設物を作りたい」と思うようになりました。

更にその思いを決定付けたのは、大学時代に経験した東日本大震災です。地震によりガス・水道・電気等のライフラインが停止し、山は崩れ、国道も寸断されて救助隊も救助に行けないという状況が福島県内のあちこちで見られました。

さらに追い打ちをかけたのが東京電力福島第一原子力発電所の爆発による放射性物質の飛散です。その時は「被爆するから外に出ない方がいい。避難した方がいい。」と様々な噂が流れ、未曽有の大災害に皆、自分の事で精一杯でした。

そんな中、バックホウ等の重機とダンプトラックで国道の崩落した山の土砂を運び出す建設業の方々を目にしました。昼夜問わず作業し、ついには道路を開通させたのです。その姿は、幼き日の叔父がそうだったように、まさにヒーローそのものでした。そして「人々の生活を救う仕事がしたい」という思いが一層強くなり、建設業に従事することを決めました。

現在、私は東日本大震災において甚大な被害を受けた福島県浜通りで、災害復旧工事に携わっています。

幼い頃、家族旅行で訪れた際には、潮干狩りや海水浴をしている家族連れや観光客で賑わいを見せていました。

しかし、震災後に目にした光景は以前とは全く異なっていました。かつてあった堤防や商店、砂浜は無く、壊れた堤防や家の基礎、山積みの瓦礫のみが残されている状態でした。テレビや新聞で震災の悲惨さを知っているつもりでしたが、実際の光景を目の当たりにして、震災の脅威、悲惨さを痛感しました。

私の現場は津波によって壊れた海岸堤防の復旧工事でした。海岸工事の施工はまだ三年目の新米社員だった私にとってはどれも初めての経験で、日々勉強でした。

そんな時、私は堤防基礎の均しコンクリートの打設高さを間違えるというミスをしました。コンクリートを斫って壊してから、次の日の打設の準備をしなければならず、職人さんに夜遅くまで残業してもらう結果になってしまいました。自分のミスで多大な迷惑をかけてしまった事に、当時はかなり落ち込みました。

今は、その時の申し訳ない気持ちと感謝の気持ちから、職人さんの作業効率が上がるような段取りを常に心掛けています。

二年四ヶ月の長い工期も終わり、無事に海岸堤防が完成した時は、涙が出るくらい嬉しく、計り知れない程の達成感がありました。建設業の魅力はなんといっても、この完成した時の「達成感」だと私は思っています。

現場内で問題が起きた時、発注者の方や受注者である私達、職長で必死に解決案を考え話し合い、問題解決の糸口を模索して最善の方法で施工する。その繰り返しが現場だと思います。現場で働く全員が考え、話し合うことは非常に大切です。そして、それをまとめて、全員のベクトルを合わせることが私達の役目だと思います。苦労はありますが、この達成感は他の業種では味わえないのではないかと感じます。

この仕事は、決して楽な仕事ではありません。しかし、完成した堤防を散歩する年輩の方に「助かった。これで安心して暮らせる。ありがとう。」と声をかけられると、言葉では言い表せないほどの喜びを感じます。また、「人々の生活を救う仕事がしたい」という思いを少しですが実現出来たのではないかと感じています。

私はこの建設業という職業はヒーローになれる職業だと思っています。目立って人の命を救ったりするわけではありません。しかし建設業は震災で苦しむ人々を違う角度から救う「ヒーロー」ではないかと思います。私はまだ、駆け出しのヒーロー見習ですが、これからもっと努力し、勉強し、考え、苦労しながら本物の「ヒーロー」になれるように一生懸命尽力していきたいと思います。

国土交通大臣賞

チームプレーの虜

寺田 智子［加賀建設㈱］

じりじりと容赦なく照りつける日差しが私の体力を奪う。建設業に足を踏み入れてはじめて経験する夏の暑さは、今まで猛暑日を冷房の効いた部屋で過ごしてきた私にとって想像をはるかに超える過酷なものだった。

私がこの業界に興味を持つようになったのは親戚の叔父の存在が大きい。お喋り好きな明るい性格で、一瞬で場の雰囲気を明るくできる機知に富んだ人物である。私はこの叔父に幼い頃からなついていた。ゼネコンに勤務し定年までバリバリの現場監督を務め上げたキャリアに誇りを持っており、盆や正月に親戚が集まった時など、自分が携わった現場での逸話を武勇伝のように語った。「おっちゃんな、ずっと地下鉄が走るトンネルを掘ってたんやで。そりゃもう大変な現場やった。でも、おっちゃんや大勢の人が一緒に頑張ったからこそ今、地下鉄が走りよる。簡単に行きたい所へ行けて便利やろ？」携わった工事現場での苦労話、苦労を乗り越えて完工した時の喜び、人々の生活を便利にする建設業に携わった事への誇りを臨場感たっぷりに話すのが常であった。七十歳近いにもかかわらず少年のように目をキラキラさせて語る姿を見て、私もこの楽しそうな仕事をしてみたいとおぼろげながら思うようになった。

気が付いてみると、私が選んだ進路は普通科の高校ではなく土木について詳しく学べる工業高等専門学校だった。現場監督に僅かの憧れを抱いて進路を決めた私だが、選んだ部活は日焼けするのを嫌ってバドミントン部という優柔不断さもある。

そんな私が現場監督に就いて２年が経った。自然を相手にする仕事で当然夏は暑く、冬は寒い。日焼けを嫌った学生時代の自分にとって信じられない程、夏は日に焼け、真っ黒になる。その姿を見かけた恩師が心配して日焼け止めクリームを差し入れてくださったくらいだ。しかし、今の私は日焼けなど気にならないくらいこの仕事に魅力を感じ、のめり込んでいる。

入社して最初に配属になった現場は、景観地区の中心部に芝生広場を造る工事だった。工事終盤からの途中参加であった。配属から数日後に広場内にできる園路と階段のコンクリート打設が行われた。ポンプ車を操作し生コンを圧送する者、圧送された生コンを敷均す者、コテで天端均しをする者、誰一人無駄な動きをしている者はいなかった。私は何も分からずただ見ていることしかできなかった。この中で一人だけ蚊帳の外のような気がして悔しく、情けない思いをした。

その後、広場の中心を流れる小川のようなせせらぎ水路を造る工程に差し掛かり、位置出しの測量業務を担当した。明らかに広場のシンボルになる構造物の位置出しという重責に緊張した。丁張りを設置し、重機オペレーターに所定の位置まで土砂を掘削してもらう。その後、砕石を敷いて転圧し、均しコンクリートを打設した。その上に鉄筋を組み、躯体コンクリートを打設し、せせらぎの概形ができ上がった。ここから仕上げ作業に取り掛かる。水が流れる水路の底面に化粧砂利を敷き詰める作業だ。石工の職人たちに混ざり私も一緒に作業した。手作業でひとつひとつ丁寧に並べていくうちに、完成形が見え始め、胸が高鳴った。すべての化粧砂利を並べ終え、せせらぎ水路が完成した。

完成したせせらぎ水路に通水し、上流から下流に一定の速さで水が流れていく光景を目にした時、今までの人生で他では得たことのない感動を覚え、鳥肌が立った。自分も物造りの輪に入れた事を実感し、喜びを感じた。工事が終わって気付いたのだが、顔も手も日焼けで真っ黒になっていた。学生時代は日焼けを嫌がったが、この時は現場で働く一員になれた事の快さが勝り嬉しかった。

建設業の魅力は、各々の役割を担ったスタッフが協力して一つの構造物を造り上げる事にある。現場監督や重機オペレーター、重機をアシストする作業員。全員で工事の効率化と安全性を追求し、入念な打合せを行いながら進めていく。そのうちの誰かが欠けても工事の進捗は止まる。各々の専門家たちが知恵を絞り経験を活かし、力を合わせて一つの構造物を造り上げるチームプレーに他ならない。工事に関わる全員が最高のものを造りたいという気持ちで協働し、全力で仕事に取り組むこの業界は本当にカッコイイ。

入社当時は何も分からずただ見ているだけだった私も、上司や職人の指導のおかげで、少しずつ出来る事が増えてきた。しかし、覚えなければならない事がまだまだ沢山ある。理解すべき事が多すぎてくじけそうになる事もあるが私は負けない。いつか一つの現場のスタッフの中心で「最高のものが出来た。」と喜び合える日を目指して。

土地・建設産業局長賞

「笑顔」を創る

仲村 竜一［春山建設㈱］

「パパー、早く歩いてよー。」

週末の日曜日、はしゃぐ子供たちに急かされながら子供たちがお気に入りになっている近所の川に遊びに行きました。

そこは、10数年近く前に、川幅を広くしたり護岸を施したりする改修工事が終わった小さい川で、遊びに行った辺りは親水護岸が施され、川の隣にはちょっとした公園があります。

目的地に到着すると川には2匹のカモが泳いでいて、子供たちはカモを見つけると階段をかけ下りて行きました。転ぶんじゃないかと心配しながら、子供たちを追いかけて水が流れている所より一段高く平板ブロックが敷並べられている所まで下りていくと、その一角にいろんな色の石を並べて描いた神輿を担いでいる姿を見つけました。

『あぁ、これもやったよなぁ～』

私が工業高校を卒業して社会人になり、初めて配属された現場は、蛇行している川を直線に直す目的と、地域の人の憩いの場となる親水護岸にする目的の工事でした。

新入社員の私は現場管理など何一つ解らず、毎日毎日不安の連続で、先輩方から写真の撮り方、測量のやり方等を教えてもらいながら、与えられた仕事をなんとかこなすのが精一杯の毎日でした。当然、工事が進んでいく様子を見るのも初めてで、作業が進む度、新たな発見の連続でした。

巨大なコンクリート構造物の寸法がmm単位で調整し、管理されていたり、護岸は重さ40kg弱あるブロックを作業員の手で1つ1つ丁寧に積み上げられていく過程を見ていると、今まで何気なく見てきた街の風景が建設技術者たちの汗と苦労の結晶なんだと気付きました。そして、私がこの先、会社の先輩たちも含めた建設技術者たちのように成れるのだろうかという不安も抱えていました。

職場にも徐々に慣れ、工事も順調に進んでいた9月、突如洪水が起こりました。集中豪雨で上流にあるダムの貯水量がオーバーしてしまい川が氾濫、付近の住宅は床上浸水してしまったのです。

現場も当然冠水し、既設河川に接続していなかったため巨大な水たまりになってしまいました。すぐに大型の水中ポンプを数台用意し、4日間水を汲み続けました。

その間、私は所長と作業員とで被災した近隣の家をまわり、家に流れ込んだ、人では到底扱えない大木やガレキ、ごみの撤去を手伝うことにしました。重機のオペレーターがバックホウを使ってテキパキと作業をしていると、近隣住民からとても感謝され、生まれて初めて人のために役に立った実感が得られ、誇らしい気持ちになったのと同時に、建設業はモノを造るだけではなく、災害活動をすることで、地域の人たちを守っているんだと気付きました。

その後、無事に工事は完成し、最後に高所作業車に乗って、緊張で手に汗握りながら完成写真を撮影したときはとても嬉しく、記念に作ったテレホンカードは今でも私の思い出の品になっています。

そんなことを思い出しながら、はしゃいでいる子供たちの後ろを歩いていると、『あの時頑張って仕事をしていた現場が、20年以上も後の未来で自分の子供たちの笑顔につながっているんだな～。』と思うと感慨深く、そして何か不思議な感覚になりました。

建設工事はみんなが便利になる、みんなが安全そして安心になるモノを造ることです。その〝みんな〟の中には未来の自分や家族、そしてまだ見ぬ私の孫たちも含まれています。未来のみんなの笑顔が創れる建設業に従事する者として、未来のみんなに恥じない良い品質のものを今後もより多く造っていきたいし、これからの建設技術を担ってゆく後輩技術者たちにも私が経験し、身に付けてきた技術をつないでいくことで、笑顔の絶えない未来を創っていきたいと思います。

土地・建設産業局長賞

若者が語る建設業

中込 恭平［丹澤建設工業㈱］

「最低でも5年は怒られるぞ」これは、建設会社に入社し右も左もわからない頃、上司が放った言葉だ。

あれから２年が経ち、現在入社3年目。今年は後輩ができ、先輩になったものの上司の言葉どおりまだまだ怒られることが多い。私の仕事は土木工事の現場管理。人生初の現場は盛土工事だった。初めての仕事に不安と緊張はあったが、「やってやるさ！」とやる気満々だったのは最初だけ、自分の描いていた青写真どおりにならない日々。雨の日、炎天下でも仕事をした。残業は毎日あった。朝も早かった。肉体的・精神的に辛かった。それでも、辞めたいという気持ちは湧いてこない。それは、厳しい気象条件にも関わらず、黙々と働き続ける職人。ただならぬ情熱を持ち、徹底的に現場を管理する上司。身近にいる人たちの仕事に対する想いを肌で感じ、支えとなる言葉を、上司にかけていただいたからだろう。

現場管理と一言で表せるが、仕事の内容はさまざま。作業計画・資材発注・安全管理・出来形管理・品質管理・工程管理、トラブルの対応に職人さんへの指示と、山のように仕事があった。怒られ、四苦八苦しながら仕事をこなす。そんな日常で、上司が言った。「初めから仕事ができる人なんていない。わからないことがあって当然だ。怒られながら仕事を覚えるのが今、君の仕事だぞ。」

胸に突き刺さる言葉だ。すぐに野帳を取り出し、最初のページに大きく「怒られるのが今の仕事」と書く。書いた文字を読み返し、精一杯仕事をしようと思った。すると職人さんに委縮しなくなり、自分の方から積極的に話しかけることができた。そして、建設業最大の魅力に気づいたのだ。それは、多くの人と出会えること。現場で仕事をする職人さんは多種多様で挙げきれないほど。他にも、資材業者・生コン業者・誘導員と盛りだくさん。そんな出会いの中、話しをしていると仕事に対する熱い想いが伝わってくる。その想いを全面に出している方は少ないのだが、皆、胸の内で黙々と燃やしているように感じる。そんな熱い想いを持った人々が協力し、構造物は出来上がっている。多くの人たちと1つの目標に向かい知恵を出し合い、工事を終えた時の充実感はたまらない。これまでの苦労が報われ、この仕事を選んで良かったと心の底から思えるのだ。

建設業を語る上で、3Kの話しは避けて通れない。「きつい」・「汚い」・「危険」この３つを称して使われる言葉だ。確かにそのとおりだと思う。しかし、そんな言葉で薄れてしまうほど、建設業の魅力は薄っぺらいものではない。建設業の魅力とは、社会基盤を作ること。純粋に、人のためになる仕事だ。皆さんも、雪が積もった早朝から建設会社の人たちが除雪作業をしているのを見たことがあると思う。私が入社した年は、１００年に1度と称される大雪が山梨を襲い、県外へ続く道路は通行できず物流がストップ、地域によってライフラインは機能しなくなり、山梨が陸の孤島となった年。私は高校の卒業を控え、アルバイトという形で会社に通っていたのだが、自分の背丈を遥かに超える積雪で身動きが取れない状態。２日後、車で通行できるようになったが、歩道側にはまだ見上げるほど雪が積もっていた。私は会社の除雪作業に誘導員として参加。作業をしていると近隣の方から、「御苦労さまです。」や「ありがとうございます。」と声をかけていただいた。入社前で建設業界のことはさっぱりだったが、構造物を造るだけが建設業の仕事ではないと強く感じた。そして、「地域を支えているのだ」という激しい感情に襲われ、建設業界に足を踏み入れられたことを嬉しく思った。私たちがやっている仕事は人のためになり、地域を支えている。なくてはならない。そして、誰かがやらねばならない。その誇りと実感があれば、3Kという悪いイメージ以上に「魅力」・「やりがい」・「喜び」のある仕事だと断言できる。

私の今後の目標は、上司から巣立ち自分で現場を管理すること。今以上に責任が重く、精神的な負担が増える。臨機応変に物事に対処する能力を高めなければならない。そのために、上司と一緒に仕事ができる今のうちに駄目な部分を指摘してもらい、改善する必要がある。つまり、もっと怒られなければならない。それが今、私の仕事であり、将来のためなのだから…。

最後に、「建設業は3Kだけじゃない！」と建設業界で働く1人として声を大にして言いたい。

土地・建設産業局長賞

苦労したからこそ

松本 史人［㈱河村産業所］

講演者に「バブルが崩壊しまして」と何度も何度も聞かされた新入社員研修から、5年、結婚もして、経験を積み、公私ともに充実した日々を送っていました。そんな時とある高速道路の建設工事が大変なことになっているから手伝いに行ってくれと言われ、ある現場に配属が決まりました。

運の悪い事にその高速道路は「税金の無駄使いだ」と騒がれ、世の中から大バッシングを浴びていました。予算が大幅に不足し大きな設計変更が必要で対応に追われている状態でした。

何とか計画の変更に目途をつけましたが、工事を行なうには住民の方に工事を「高速道路は無駄使いではない」事を理解してもらう事が必要です。

毎日のように住民を訪問しました。私の地元で実際に起こった、高速道路が通らなかった為に地場産業が衰退した例を含め、どれだけ高速道路が重要な施設であるかを何度も説明しました。昼は測量作業、夕方からは住民訪問の日々が続きました。

私たちの説明が良かったのか、もうあきらめたのか、工事を行なえるだけの理解を得て工事を着手しました。

苦情で工事を止められないよう埃、振動、音、大型車両の通行など、対応できるものは何でもしました。

工事が順調になると、毎日忙しいながらも充実した毎日でした。住民さんの苦情は世間話とお互いの困りごとの相談に変わっていきました。荒っぽくて周りになじんでいなかった構造物が、仕上がってくるにつれ、どんどん景観に溶け込んでいきました。

あと半年で工事が終わろうとしているある雨の日でした。それなりの雨量が予測され、朝から作業は中止していました。現場事務所の屋根をたたく雨の音がどんどん大きくなります。雨雲レーダーを見ると50mmを超える雨量を示す紫色と赤色が予想をはるかに超える絶望的な範囲で現場に迫ってきていました。

バケツをひっくり返したような雨の中、あわてて車を走らせ現場に駆けつけました。

法面を土砂が滝のように流れ落ちてきます。出来たばかりの水路があふれかえり、道路が川になっていきます。どんどん濁った水が流れ込んで、目の前を茶色が埋め尽くしていきました。遂に住民さんの家に土砂が流れ込み始めましたが、自分にできる事は何もありませんでした。

「大変な事になった」雨に対して準備が不足していた事、何もできなかった事、そして工事を終える事ができなくなる恐怖が私を襲いました。

山田さんが帰ってきました。赤い顔をしています。怒鳴りつけられる事を覚悟し頭を下げました。ところが「すごい雨だったな。家が残っていて安心した。晴れたら、泥の掃除はたのむぞ」聞き返す間もなく玄関のドアが閉まってしまいました。

ゆるしてもらえた？明日から仕事してもいいのか？まったく予想していない反応でした。

しばらくしてドアをたたき山田さんに会う事ができました。「毎日、毎晩遅くまでやっていたのを知っている。やれる限りはやったんだろう。だいたい雨の中で立ち尽くしている人間に怒鳴るほど俺は悪い人間じゃない」その言葉に本当に救われました。

今思えばあたりまえの事なのですが、この時私は初めて、世の中は悪い人ばかりじゃない、自分がやっている事を見ている人が居る事に気づく事が出来ました。

完成に向けてどんどん忙しくなり、本当に毎日、逃げ出したい、辞めてしまいたいと思いながら頑張り続けました。遂にすべてが報われる工事の完成を迎えました。達成感、充実感そしてみんなの笑顔につつまれました。熱くなりすぎてギクシャクした人間関係も素直に「悪かったな」が言えました。あの失敗や苦労も居酒屋で語られる「小さな伝説」です。

これほど密度の濃い経験を得られるのは一回限りの緊張感の上で仕事をしている建設業だけだと思います。

この後もいろいろな工事に関わりましたが、この現場が一番苦労した分、一番楽しかった現場です。そして、大きな失敗があった事、救われた事で、現場監督としてやるべき事がはっきりと解り、やっていける自信をつけた現場となりました。

私が従事した高速道路は知らない人が見れば、どこにでもある普通の高速道路です。あれだけの苦労はどこにも見当たりません。大雨で流された跡もまったく見えません。いま皆さんの前にある、構造物もいろいろな苦労の上に作られているのかもしれません。

ちなみに「無駄使い」といわれさんざん叩かれた高速道路は今では毎日たくさんの人に利用されています。

建設産業人材確保・育成推進協議会

高校生の
作文コンクール

趣旨

国土交通省と建設産業人材確保・育成推進協議会では、建設業への入職に関心を抱いて頂くために、各工業高校の建築・土木、環境、デザイン学科などで学んでいる在校生を対象として将来の建設業で活躍する自分の姿、自分で作りたい建物などに対する「夢」や「憧れ」の仕事等について高校生の作文を募集し、優秀作品への表彰を行っています。この「高校生の作文コンクール」は平成25年度から実施し、今回で4回目の実施となりました。

募集概要

募集期間　平成28年5月16日(月)～7月15日(金)
応募資格　全国の工業高校の建築学科、土木学科等の在校生の皆さん
題　　材　・建設業に対するイメージ
　　・好きな建物、構造物(ダム、橋梁等)あるいは将来造りたい建物等
　　・建設業へ就業した場合の5年後、10年後の自分
　　※建設業に関する内容ならば自由
応募総数　1,290作品

表彰式

平成28年10月7日(金)に国土交通省にて表彰後、同日行われる「優秀施工者国土交通大臣顕彰式典」にて、受賞者の紹介及び大臣賞の朗読を行います。また、優秀作品は、(一財)建設業振興基金のホームページ上の「建設のしごと」等に掲載されます。

「建設のしごと」　http：//www.yoi-kensetsu.com/shigoto/index.html

選定委員

古阪 秀三　京都大学工学部工学研究科建築学専攻 教授
　　建設産業人材確保・育成推進協議会 運営委員会委員長
星 直幸　(一社)全国建設業協会 理事
池田 愼二　(公社)全国鉄筋工事業協会 理事
　　千葉県鉄筋業協同組合 理事長
　　(株)ダイニッセイ代表取締役
木村 実　国土交通省 土地・建設産業局 建設市場整備課長
矢吹 周平　国土交通省 土地・建設産業局 建設市場整備課 労働資材対策室長
宮嵜 徹　(一財) 建設業振興基金 経営基盤整備支援センター 副長
田尻 直人　(一財) 建設業振興基金 経営基盤整備支援センター 人材育成支援総括研究部長

国土交通大臣賞

技術者としての覚悟

齋藤 萌［福島県立喜多方桐桜高等学校 建設科 3年］

父が頭にタオルを巻き、耳に鉛筆を挟んでいる姿を、幼い頃の私はよく真似していた。また、父が仕事をしている隣では、廃材に釘を打ちながら遊んでいた記憶が鮮明に残っている。

小学校四年生のある日、学校から帰ってきた私は、父の仕事机にある一枚の図面が目に入った。初めは、何が描いてあるかわからず、気に留めていなかった。しかし、図名には「新築工事」と書いてあり、家の図面だということがわかった。家の図面はどうなっているのか気になり改めて見てみると、部屋の位置や大きさなどの構成を漠然と読み取ることができた。そして、この一つの図面を基に、家が出来上がっていくことにとても興味を持った。

あれから八年。父は変わらず六時半にタオルはちまき姿で仕事場へ行き、六時四十分には仕事場の掃き掃除をしている。そして、八時になると職人さんと朝茶を飲み、たわいない世間話やその日に行う仕事の話をしている。昼食は早めに摂り、十二時半には昼寝をする。しかし、昼寝の時も常に仕事の電話は鳴り止まず、耳に挟んである鉛筆を取り出し、午後の仕事が始まっていく。これが、八年間続いている父のルーティンである。なぜ、この地味で小汚い姿や一連の行動をするのか、父に尋ねても明確な答えは返ってこないだろう。なぜなら、職人の父にとっては、呼吸をするかのように当たり前の動作だからだ。しかし私は、これらの一連の行動が父の職人としてのスイッチをオンにさせているに違いないと思う。これらを行うことで、職人としての技術や技能を存分に発揮することができ、こだわりのある家づくりが、お客様に満足を与え信頼関係を築いているのだと感じた。

高校三年生のいま、八年間の思いが建設系専門学校へ進学することを決めさせた。この先、一人前の技術者になるためには、内容の濃いものを短時間で習得することも大事なのだが、一見、意味のないような単純で簡単なことを長くながく続けていくことの方が大切だと感じるようになった。

いつか、父の隣で仕事をしながら、「親父と変わらねーな。」と周囲の職人さんから言われた時が、一人前の技術者として認められたことになるのだと思う。これから先、長年続いた家業を継ぐ跡取り娘として、新しい知識や技術を吸収し、父とともに単純で簡単な繰り返しを確実に長く続けていくことが大切である。それが、一人前の技術者になるための私の覚悟である。

国土交通大臣賞

空間を考えること

柴田 夏葵［富山県立高岡工芸高等学校 建築科 3年］

私は高校一年生のときに初めて建築コンペに応募しました。このコンペが私の建築に対する考え方を変えるきっかけとなりました。

中学生の頃に設計の仕事に興味を持ち建築科に入学した私は、自分の力を試してみようとコンペに応募することを決めました。

初めてのコンペは、自分の頭の中にある考えをどのように表現すればよいのかがわからず、まとまった提案をすることができませんでした。結果は二次審査落選でした。

落選したときに、専門知識の浅さや自分の考えを伝える技術が十分でないことを痛感しました。これらのことをふまえて、パースの描き方や着彩の仕方、また外観や内観のデザインなど、どうすれば自分の考えをわかりやすく伝えることができるかという点に着目するようにしました。そして誰かに伝えたいときに平面的な考えではイメージがわかず、伝わりにくいことから、立体的な「空間」を考える必要があると気が付きました。

高校二年生になって人生二度目のコンペに挑戦しました。前回のコンペから学んだ「空間」を考えること、そして伝え方を工夫することを意識して提案しました。結果は高校生の部で優秀賞を受賞することができました。初めての受賞に舞い上がり、やり遂げたという達成感でいっぱいでした。しかし、表彰式に出席して衝撃を受けました。表彰式では大学生や専門学校生の方の作品が展示されており、プレゼンテーションも行われました。住宅メーカーの社員の皆さんや、建築家の方を目の前にしてのプレゼンテーションはとても緊張感がありました。審査員の方からの厳しい質問に答えておられる姿を見て、自分だったらスラスラと答える余裕はないだろうと思いました。提案する上で、考えが自分で理解できていることが当たり前とされるのに対し、私は考えが頭の中でうまく整理されておらず、自分の詰めの甘さや未熟さを思い知ることとなりました。

今までの私は「建築とは人々に場所を提供するもの」だと考えていましたが、コンペを通して「建築とは人と環境、人とモノ、人と人をつなぐ空間を提供するもの」だと考えるようになりました。

私は今、高校三年生で将来を左右する大切な分岐点に立っています。建築のことをもっとよく学びたいという思いから、進学を考えています。一言で建築といっても様々な分野があり、将来どのような職業に就きたいかはまだ決めかねています。どのような仕事に就くとしても、建築は空間をつくりだすものであるという考えを持ち続けたいと思います。

コンペを通して私は、空間をつくり出すということは創造力だけではなくイメージする想像力も必要であると考えました。技術のみならず感性を磨き、将来の仕事につなげていきたいと思います。

土地・建設産業局長賞

建築への想い

佐野 郁馬［山梨県立甲府工業高等学校 建築科 3年］

私の父は一級建築士だ。だから私は、小さい頃から家が建設されているところや建設している人たちの姿をたくさん見てきた。最初は、「家が立派に建ってすごい」とか「難しくて大変そうだな」という単純な感想しか持たなかった。しかし、年を重ねるにつれ「どうやって家を建てているのだろう」と疑問に思うようになり、建築に対して興味が湧いてきた。そして、将来は建築士になるという夢を抱き、山梨県立甲府工業高等学校の建築科に進学し、建築について学び始めた。

高校進学後、建築について勉強するにつれて私の建築に対する想いや関心は思っていた以上に大きくなっていった。いろいろなことを知れば知るほど建築が好きになり、いつしか建築に夢中になっていた。そんな時、製図の授業で自由設計の課題が出された。私は設計することがとても好きだったので、はりきってその課題に取り組んだ。しかし、いざ実際に設計してみると思ったように手が動かない。良いアイデアが浮かばなかったのだ。設計するにあたり自分が思っていた以上にたくさんの要素について考え、配慮しなければならなかった。その土地の状況、都市計画、家族構成、その家族の趣味、住宅としての利便性、暮らしやすさ、バリアフリー、外観、外構計画、予算など今まで考えてもみなかったことについて考えなければならなかった。私は建築を学んでいる上で初めて壁にぶつかった。改めて建築って難しいと感じた時だった。私はその課題を通して自分の知識不足を痛感し、もっと勉強しないといけないと思い、今までより意欲的に授業に取り組むようになった。

そして、建築について深く考えさせられた出来事がもう一つ起こった。それは熊本県で起きた大地震だ。住宅が何棟も倒れ、多くの人命と財産を失う大震災となった。この出来事を受けて私が感じたことは「責任感」だ。人命や財産をしっかり守ることのできる建物をつくることが、建設業に携わる全ての人の使命だと思う。「中途半端ではいけない」と思い建築に対する真剣さが増した。

私は大学に進学してさらに建築の勉強をしようと思っている。建築士の夢は目標になりつつある。立派な建築士になれるようにこれからも日々頑張っていきたい。

土地・建設産業局長賞

支える力

岩丸 宗也［長崎県立鹿町工業高等学校 土木技術科 3年］

私が土木技術に対して興味をもったのは小学生の時だった。子供の頃から土木の現場で動いている重機や近くの造船所などで動く巨大なクレーンを見るのが好きだった私は、いつの間にか自分もその現場に立って大きな橋やトンネル、道路などを造ってみたいと思うようになっていた。そうして中学三年の時、工業高校に入学することを決めた。

工業高校に入学しこの二年間、実習などを通して学んだ事がたくさんある。その中でも強く感じたのは「支える力」だ。私が通っているこの鹿町工業高校の実習は、コンクリート実習や測量、足場などについての実習がある。どれも仲間との協力が必要だが、その中でも一番に足場が「仲間の大切さ」を感じとれる。足場は決して一人では出来ず、重い部材などを協力して組み立てていかなければならない。その際、仲間とのコミュニケーションや安全確認のため周りへの気配りなど、常に仲間と協力しなければならない。そこから信頼関係が強まり仲間の存在が「支える力」になっている。それがどれほど大切か、この二年間で深く分かった。

私は小学生の時から野球をしている。土木と野球は似ている所があると私は思う。自分を犠牲にして塁を進めるバントや、野手が少しでも守りやすいよう配球を組み立てるバッテリー、それに応える野手陣。どれも仲間を思いやり全員で勝つという一つの目標に向かっているからできることだ。土木も同じだ。みんなで一つの目標を立て、その目標を成し遂げるために様々な人が協力し、支え合いながら構造物ができあがると思う。

土木は決して目立った職業とは言いがたい。なぜなら、トンネルや橋、道路などは人々にとって当たり前の存在になっていて、利用する人々はそれを造った人達を意識しにくいからだと思う。東日本大震災の時も、人々を救助する自衛隊や救急隊などが多く報道されていたが彼らが人々を助けに行くことができたのはどうしてだろう。被災地の方々に救援物資を届けることができたのは、どうしてだろうか。それはあの大震災にも耐え抜いた「道」があったからだ。また、その「道」を造ったからだ。様々な建設業に関わる人々が支え合い、協力しながらいろんな思いを込めて造った「道」があったからだ。

土木は目立たないし人から感謝されることは少ない。しかし私は、そんな土木を格好良いと思う。彼らが仲間と協力し支え合いながら造った道が、影で他の人を支えていた。縁の下の力持ち－いいじゃないか。私も影でしっかりと日本を支えていた彼らのような「支える力」になりたい。真の格好良さがある彼らのようになりたい。私が仲間と支え合いながら造った物が他の人を支えている。いつか、そんな土木技術者になりたい。それが今の私の夢だ。

土地・建設産業局長賞

私の憧れと夢

小山 美樹［熊本県立熊本工業高等学校 建築科 2年］

『建設業は男の世界』そう思っている人は多いと思います。私が工業高校を志望する時も周りからは反対の声が少なからずありました。実際、建設現場で働いている女性は多くても1人か2人くらいです。そんな男社会だと知りながらも、私には現場で働きたいと思うようになった一つのきっかけがあります。

それは、私が小学生の頃、私の家の隣に祖父母が家を新築し住むことになった時のことです。工事が始まり、毎日大工さんをはじめいろいろな職種の職人さんが働きに来ていました。ほとんどが男の人だったけど、その中に一人だけ女性の職人さんがいて、その方は、どちらかというと華奢な方で、現場の屈強な男性の中にいると心配になるほどなのですが、その仕事ぶりは男性に引けを取らないものがありました。女性が建設現場で仕事をしているということに驚きもありました。でもそれより一番に思ったことは「かっこいい。」力仕事も多くきついはずなのに、生き生きと仕事をする女性の姿はとてもかっこよくて、私はその女性から目が離せなくなりました。それから、学校から帰るとすぐに現場を眺めるのが私の日課となり、毎日の楽しみとなりました。私には男性と同じように汗をかきながら一生懸命働く女性がキラキラして見えて、いつからか「私もあの人のようになりたい！」と思うようになり、その女性は私の憧れの人となりました。

工事が進み、家の完成間近になった頃、もう憧れの人に会えなくなると思った私は、思いきって彼女に声をかけてみました。緊張しすぎて何を話したのかよく覚えていないけれど、「この仕事はきついことも多いけど、すごくやりがいがある仕事だよ。」と言われたことだけは鮮明に頭に残っています。なぜなら、その言葉を聞いた時が私のターニングポイントとなったからです。それで私には現場監督になりたいという夢が出来ました。

家も完成し、彼女と会うことはなくなりましたが、家にいるとその作った人の温かさや思いやりのある空間に包まれ、その時の思い出が鮮明に蘇ってきます。私もそんな温かみのある家をつくりたいと思い、ますます夢への思いが強くなりました。

そして、夢の実現に向けて熊本工業高校の建築科に入学した私は、建築の勉強をするにつれて、私の選択は間違えていなかったと思いました。

そんな中熊本での震災がありました。構造設計を勉強していますが、人の命を守る建築の奥深さも初めて知ることが出来ました。

来年は進路を決める大事な1年です。先生方から、最近は建設業の女性の求人も増えてきたという嬉しい話も聞いています。

10年後、私は憧れの彼女のような建設現場で活躍できる監督になりたいと思っています。そして、自分の仕事に誇りを持ち、「この仕事は、いい仕事」と胸を張って言いたいです。

しんこう-Web
KENSETSUGYOU SHINKOU WEB MAGAZINE
地域建設業のためのウェブマガジン
http://shinko-web.jp

建設産業人材確保・育成推進協議会　事務局／ 一般財団法人 建設業振興基金

〒105-0001 東京都港区虎ノ門4-2-12 虎ノ門4丁目MTビル2号館6階　TEL 03-5473-4572　FAX 03-5473-4594
E-mail shinkou@kensetsu-kikin.or.jp　URL http://www.yoi-kensetsu.com/

※本冊子掲載記事の無断転載を禁じます。